第５分科会　　俯瞰図番号（Ｅ４）

身近にあふれるたからものを活かして・・・
～つながりの輪の中で、共に楽しみ・共に創り出す～

発　表　者　中村詩織（鳥取第三幼稚園）
指導助言者　上島逸子（前鳥取短期大学准教授）
司　会　者　平井裕子（鳥取第三幼稚園）
記　録　者　花岡佑子（鳥取第三幼稚園）
　　松本海帆（鳥取第三幼稚園）

１．発表の概要

（１）主題設定の理由

本園は、令和５年度より生後７ヶ月から就学前の子ども達を対象とした「幼保連携型認定こども園」に移行し、０歳児から５歳児の保育がスタートした。そこで、人との関わりを改めて見つめることの必要性や園として一貫した教育・保育の在り方を探るため、令和５年度より「人と人との関わり」に着目して研究を進めてきた。そこで、全学年で保育のつながりがどのようなものであるかを確かめるためにウェブマップを使って遊びを図式化し考察したところ、子どもの周りにはヒトやモノ、コトの要素が関係し合い、つながり合っていることがわかった。一方、課題として様々な要素が関連し合っているものの、遊びがその日その日で途切れてしまい、次の日や次の遊びにいかされず、広がっていないため、遊びのつながりを意識する必要があること、子どもの主体性を大切にした遊びについて考えること、乳児部と幼児部の生活の違いから、遊びの共有の難しさや情報発信の仕方を考える必要があることなどが見えてきた。

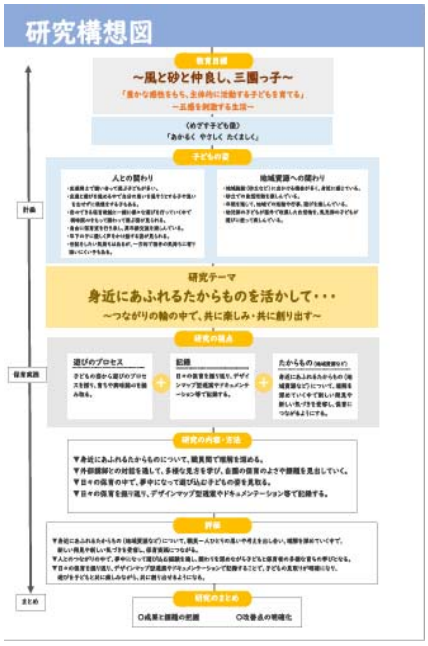
そこで、今年度は日々の保育をデザインマップ型週案やドキュメンテーションを使って遊びや育ちを可視化し、そこから見取り、評価を行い、次につながる保育を探ることにした。

そして、園のよさでもある身近にあふれるたからもの（地域の資源など）の遊びを活かし、長年の関わりの中で培われた多様なつながりの輪の中で、子どもと保育者が共に遊びを楽しみ、共に遊びを創り出す保育を実践し、研究を進めることにした。

（２）取り組みについて

◎研究構想図を作成する

・研究を進めていくために必要なことや進め方を職員で共通理解を図り研究のねらいを明確化する。
・教育的・客観的に総括し評価し、評価によって改善につながる新たな視点や課題を明らかにする。
・具体的な見通しをもって、次への研究テーマを設定する。



◎研究の方法・視点

【遊びのプロセス】

・デザインマップ型週案の導入、ドキュメンテーションや写真、動画を用いた園内研修を通して子どもの姿から遊びのプロセスを探り、育ちや興味関心を読み取る。

【記録】

・デザインマップ型週案では、中心となる活動や子どもの姿やつぶやき、育ちつつあるところなどを記録し、手立てや子ども理解に基づいた評価や振り返りを行い、翌週のねら

いや計画に反映していく。
・日々の保育を振り返り、指導計画（全体的な計画・年間計画・期案・月案・週案）の改善につなげる。

【たからもの（地域の資源など）**】**
・子どもと全職員で、どのようなヒト、モノ、コトがあるかを言語化する。
・外部講師による研修を行う。

（３）実践事例
◎各学年で研究テーマに沿った年間の目標を立て、ねらいをもって保育を行う
０歳児「お花紙あそび」
安心できる環境の中で、様々な物の面白さを知り、保育教諭と愛着関係を築く
１歳児「絵の具あそび」
身近な環境に自ら関わり、保育教諭と共に様々な遊びを楽しむ
２歳児「砂場遊び」
身近な環境に関わる中で、保育教諭や友達との関わりを広げていく
３歳児「忍者ごっこ」
保育教諭や友達と遊びを楽しむ中で、共に遊ぶ楽しさを知る
４歳児「自然環境」
様々な環境の中で発見を楽しみ、友達と一緒に夢中になって遊び、充実感を味わう
５歳児「グループ対抗砂山作り大会」
地域の環境に積極的に関わり、試行錯誤しながら共に遊びを進めていくことを楽しむ

≪発表事例≫
４歳児の実践事例
エピソード①『コバンソウっていうんだって』
Ｉ児がカップいっぱいにコバンソウを摘んで、見つけたことを嬉しそうに教えてくれた。そこでＩ児に、名前を知らせると、名前を知ったことを喜び、コバンソウを見つけたことをクラスのみんなの前で発表した。形の特徴を、絵本やイラストを使って知らせると、影絵の「うらしま太郎」を見た経験から、小判とコバンソウの形が子ども達のなかでつながった瞬間となった。それからは、クラスでコバンソウがブームとなり、園庭やお家で摘んでは、発表し合う日が続いた・・・

育ち・考察
・発見を楽しむ （気づきや発見から生まれる喜び） ・興味関心をもつ ・興味があることを図鑑で調べる ・友達と一緒にする ・虫メガネ制作をしたことで、虫メガネと図鑑が子ども達の定番アイテムとなり、より深く観察する姿が見られた

エピソード②『砂丘のたからもの』（アリジゴク・ハマヒルガオ）
砂丘に散歩にいった年長児が、「ハマヒルガオが咲いていたよ」と教えてくれた時、「行ってみたい！」と声があがり、砂丘に出かけた。出かける前に、花は摘んではいけないこと（国立公園保護区域のため）を知らせるため、ハマヒルガオは砂丘の宝物だと伝えると、子ども達で話し合う姿が見られた・・・
帰り道、穴を見つけ、掘ってみると予想もしなかった１匹の生き物に出会った。園に帰り調べてみると、それは『アリジゴク』であることが分かった・・・

育ち・考察
・出発前のルールや約束の話し合い（対話） ・見たものを自分と同化させイメージの世界（アリジゴクの模倣・家作り）で表現を楽しんだ ・砂丘ビジターセンターとの連携

エピソード③『砂場遊び』

園庭の砂場で穴掘りが始まり、一人で一生懸命穴掘りをしている友達の姿を見て輪が広がり、いつの間にかクラスみんなで穴掘りをすることになった。「温泉みたいだね」とのつぶやきをきっかけに、みんなで温泉作りが始まった・・・

園庭の砂場に突然、砂像が出現。前日に職員研修で職員が作った砂像を見て、目を輝かせた。作ってみたいとの子ども達の気持ちを受け止め、一緒に砂像作りに挑戦した。なかなかイメージ通りには作れないことから、砂丘で「すなばようちえん（砂のルネッサンス企画）」と一緒に砂遊びや砂像作りをして遊ぶことになった・・・

育ち・考察
・気づきを遊びに活かす ・『すなばようちん（砂のルネッサンス企画）』への参加 ・対話から生まれるイメージの共有 ・友達のしていることに目が向くようになり、手伝ってあげる姿や、友達の意見を受け入れる姿などが育ちつつあり、子ども達の成長を感じた ・天候に左右されがちの戸外遊びでは、遊びの継続の難しさがある反面、偶然が創り出す面白さがあり、その偶然を活かすことで子ども達の遊びが途切れることなく、継続するのだと感じた ・自分達の世界を自分達で創り出していく様子が見られた ・友達とダイナミックに遊びを展開する

エピソード４『突然のお客さま』（アカテガニ）

突然、保育室の廊下にカニが現れ、図鑑を開いて名前を調べるとアカテガニだということがわかった。家作りや観察活動が始まった・・・今も大切に飼育中である。

これらを保護者と一緒に、子どもの気づきや発見・疑問を共有したいと考え、学年だよりやHP、ドキュメンテーションで伝え、子ども・保護者・職員と３者で共有できる場を作っている。

育ち・考察
・家づくりでは、図鑑や今までの経験、年長児から話を聞いて自分達で考えながら準備をした ・疑問のつぶやきから、かにっこ館に出掛けたことで、探求心が深まった ・子ども、保護者、保育者で気づきや発見や疑問等を共有した。保護者と、子どもの興味関心や育ちを共有することで、保護者からも声が上がり、飼育方法などに活かすことで、子どもの遊びがより一層深まり、連続性をもつことができた ・子どもが夢中になって生き物と関わる姿を見て、保護者も興味関心・意欲につながった

５歳児の実践事例

『グループ対抗砂山作り大会』

年長児は７月にお泊り保育を行う。そこでやってみたいことを子ども達と話し合うことにした。すると、昨年度の年長児が行った砂丘ナイトウォークに憧れ、夜の砂丘に行ってみたいとの意見が出た。それをきっかけに、子ども達と“やりたいことリスト”を作った。リストの中のひとつ、『グループ対抗砂山作り大会』をすることになった・・・

育ち
・砂丘と園庭との砂の性質の違いに気づき、その性質を作戦に活かす姿が見られた ・自然や数量への関心等、遊びを通しての学びとなった ・砂丘だからこその気づきが、遊びに活かされた ・グループの友達と作戦を立てる姿、友達の意見に耳を傾ける姿、そして決まった作戦を協力して実行するなど、協同的な学びの姿が見られた ・幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿の観点で見取ると、育ちつつあることが分かった

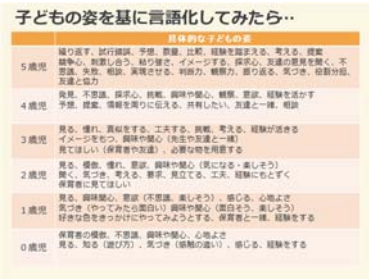
（４）考察のまとめ

◎各年齢の事例を基に、子どもの姿を言語化し、資質・能力の三つの柱に沿って考察。

◎育みたい資質・能力の三つの視点を踏まえた基本となる『主体的・対話的で深い学び』の視点から読み取り考察。

・可視化することで年齢なりの主体的・対話的で深い学びがあることがわかった。

・年齢を重ねるにつれ、育ちの幅が大きく膨らんでいく事を捉え学びの深まりが見られた。



◎０歳児から５歳児で、どのようなつながりがあるかを考察。

・養護を土台に年齢が上がるにつれ教育（育ち）が育っていく。

・様々なヒト、モノ、コトとの関わりを通して、好奇心・探求心・協同性が育まれる。そこから個としての充実感や満足感が育まれ、場を共有することで人の輪が広がり、気づきや発見など共有することで協同性も生まれる。すなわち、人とつながる育ちも見え、幼児期の学びに向かう力が育っていることがわかった。

◎０歳児から、主体的・対話的で深い学びの経験を積み重ねことで、資質・能力の３つの柱の芽生えが育まれると捉えた。

・多様な環境を通した、学びの連続性も大切であると考える。

・保育者は、主体的な活動の中で、経験の幅を広げられるように、子どもの姿を見取れる力をつけていくことが大切であると感じている。

（５）研究の視点に対するまとめ

【遊びのプロセス】

・子どもの姿をできる、できないで判断するのではなく、子どもが環境に出会ってどんなことに興味をもっているのか、どんな風に工夫しているのか等、保育者が今の子どもの姿を共感的、肯定的に捉える。共に遊びを楽しんだり、見守ったりしていく中で、遊びから次のねらいを立て、環境構成を考えていくことが、豊かな体験を生み出すことになると考える。

【記録】

・遊びのつながりや次の環境構成を考える上で、デザインマップ型週案やドキュメンテーションは有効であると考える。

【たからもの】（地域の資源など）

・『たからもの（地域の資源など）』を可視化することで、保育者と子どもが思う『たからもの』の捉えに違いがあることや、今まで保育者の思いや考えを優先していた気づき、子ども主体の遊びや

活動の展開を考えられるようになった。

（５）今後の課題

・今の子どもの姿を見逃さない保育者の意識の向上に努めること。
・保育者の思い込みや経験からくる予測ではない見取りをし、保育のねらいを立てること。
・「主体的・対話的で深い学び」を職員間でも行う。その為の時間の確保を工夫すること。

２.研究討議

（１）発表内容に対する質疑応答

Ｑ：タイトルに“身近にあふれるたからものを活かして”とあるが子ども達にとって『たからもの』とは、どういう捉えで子ども達におろしたのか。

Ａ：『たからもの』のアンケートを取ったのは３歳児から５歳児の子ども達である。イメージがつきにくいと思い、大好きなものという捉えで子ども達におろした。『たからもの』の中には、子ども達の大好きなものが描き出されている。

Ｑ：手作りの虫メガネをみんなが首から下げていたが、どういう風におろしたのか。また、どのように普段使っているのか？

Ａ：子ども達が発見を楽しんでいる姿から制作活動につなげた。虫メガネ作りは、一人一人が絵を描いてオリジナルの虫めがねを作った。自分で使えるよう、道具箱に入れている。

（２）全体討議（グループワーク）

≪デザインマップ型週案の作成≫

① ０歳児から５歳児のグループに分かれる。
② 一枚の写真から子どもの姿を考察するし、今週の遊びを予想する。
③ 遊びの中の子どもの姿やつぶやきを予想し、明日の予想される遊びを記入する。
④ そこで必要な環境構成や教材準備などがあれば記入する。
⑤ 子どもの姿を想像しながら、気軽に対話をしながら楽しく取り組む。

≪自園のたからものはどんなものかあるかを書き出す≫

≪学びの共有≫

※デザインマップ型週案や『たからもの』について学びの共有をすることができ、取り組んでみたいと思う。

※取り組んでみての感想…子どもの姿やつぶやきを日頃から言語化する経験がなかったことから、難しさを感じたが、子どもの様子を読み取りながら、遊びがつながっていくことが体験でき楽しかった。

（３）指導助言

１．研究の始まり

・昨年度から研究に取り組み、鳥取第三幼稚園の恵まれた環境、鳥取砂丘は第二の園庭、地域の人たちとのつながりが入っていることが鳥取第三幼稚園の特徴、強み、良さだと感じる。
・令和５年度から幼保連携型認定こども園に移行し、今までと違った課題が見えてきた。必要感が生まれ、人との関わりを改めて見つめ直す必要があると考えた。
・一貫した教育・保育の在り方を探る必要性があると感じる。この必要感があることが研究を進める上では大切なことだと思い、人と人との関わりのところについて研究をしようと考えた。人と人との関わりになると、保育者や子ども同士の関わり、異年齢での交流や地域の人たちとのつながりなどが頭に浮かぶ。
・令和５年度の研究テーマは人と人とがつながる保育とまとめている。担任が個々につながりを意識して保育をし、それぞれの担任が考えて保育をしてきた。すると自分の担任している年齢のことは

考えるが、他の年齢は少し理解が難しかった。０歳からのつながりを考えていたが、共有することが進まなかった。ここを見直そうとＰＤＣＡを評価し、改善した。そこが令和６年度の取り組みになっていく。人と人がつながるよう意識をし、保育のつながりを確認する必要があることが令和６年度の研究につながっていく。
・保育のつながりを確認するためにウェブマップを活用した。図式化、見える化をして考察したことが大事であり共通理解をした。
・令和５年度には取り組めなかった部分の様々なものや人とのねらい、関わりが乳幼児期の育ちを支えているということに気付き、遊びのつながりを意識する必要性があることに気付いた。
・鳥取第三幼稚園の取り組みでは、保育者が考察をし、子どもと一緒に保育を行うといった主体的な研究になっていった。ＰＤＣＡサイクルの繰り返しがいろんな場面で見られ、研究が深まっていった。１つは保育者間の対話が必要であり、同僚性が生まれてくる。時間の確保が難しいとは思うが、なくても大事にしてほしい。試行錯誤しながらも見える化をし、計画を立ててやってみるということを繰り返していた。この「試行錯誤をした」というところが鳥取第三幼稚園の学びたい姿勢の表れである。

２．「身近にあふれるたからものを活かして…」がもつ意味

・身近な『たからもの』を子ども達に聞いてみたところ、子どもが捉えるたからものの捉えは、子どもと保育者では考えが違っていると思う。子どもが捉える『たからもの』は足元にあることが分かり、子どもが捉えている気付きを保育者が理解しなければならない。
・新しい発見や新しい気付きを受容していくことが必要である。子どもの方からたからものに気付くよう、保育者が環境を構成していく。
・“身近にあふれるたからもの”という意味は、子どもと保育者が共に環境を構成していくと考える。その結果、遊びも深まっていく。また、豊かな体験が積み重なり、学びが充実していくと感じる。
・子ども達の気付きを大事にしながら保育に取り組み、先生達の思いや願いも合わさっていくことが大事だと思う。これが一緒に環境を構成していくということではないかと考える。
・エピソード１のコバンソウの話では、子どもが名前も知らない草の発見をしてきた。そこでコバンソウの名前を保育者が伝え、名前がつき、子ども達が喜んだというところが保育者の主体性である。保育者がもっているものを環境として伝えていくことが大切である。足元にある植物や生き物に興味関心が広がっていき、図鑑や絵本などを置いたりすることが保育者ならではの環境構成だと思う。
・子ども達は自分達で調べたり、観察をしたりするために虫メガネ作りをする。虫メガネ作りをすることでもっと見たい！観察したい！じっくり見たい！という気持ちを高めていく。このような探求心を育むような環境が保育者ならではの主体性が入ってきたのではないかと思う。
・街探検でも虫メガネを持って行くようになり、たくさんの出会いを楽しむようになった。子ども達は“身近なたからもの”を見つけて、楽しんでいる。

３．「共に楽しみ・共に創り出す」保育

・共に楽しみ、共に創り出す保育についての遊びのプロセスでは、１人１人の姿を丁寧に見取り、子どもの主体的な姿を尊重して遊びや活動のつながりを俯瞰的に捉える。これを遊びのプロセスと捉え、記録をしていく。中心となる活動を書き出し、子どもの姿やつぶやき、育ちつつあるところなどを評価や振り返りを行いながら続けていく。
・デザインマップ型週案とは案だけではなく、実際に遊んだ後の子ども達の姿やつぶやきなど子ども達の思いを見取っていくことが大切である。週案で見える化することで、他の職員も子ども達がどんな思いで遊びを展開しているのかということが理解でき、週案を基に次の遊びがどのような展開をしていくのかと考えながら、書き込む。さらに、保育後には実際に遊びがどのように広がっていったのかを書き込んでいく。子ども達の具体的な姿が書きこまれていく週案になっている。
・学びのプロセスでは、興味関心をもつ、発見を楽しむ子ども達の姿から一緒に実践するところまで

のプロセスが繋がっている。その体験をエピソード２に合わせ、発見を楽しんでいるところは、“砂丘のたからもの”という実践だった。砂丘の至るところに穴があることを発見し、興味関心をもって見ていると、生き物がでてきた。観察をしていると、後ろ向きに歩いている生き物を発見し、園に帰ってすぐに図鑑を開いて調べてみたところ、“アリジゴク”ということが分かった。興味があることを調べていく。興味が広がっていくことで歩いて真似をしてみたり、アリジゴクの家を作ったり、アリジゴク探しに出かけたりと保育のつながりを感じる実践だったと思う。

４．「育ちや学び」をつなぐ保育

・何回も発見を楽しむところは、コバンソウやアカテガ二の実践も繰り返されているように感じる。遊びのプロセスは、架け橋期のカリキュラムの目指す子ども像、期待する子ども像、資質能力の次に学びのプロセスがあり、子ども達は繰り返しをしていく中で深い学びになっていくことを見つけ、友達の関わりも深まっていっている。
・つながりの中で子ども達がどんな風に心が動いていき、主体的に取り組めるのかをこれから考えていきたい。主体的で対話的で深い学びを文字化、見える化をしたものを基に話し合いをしていくと０歳からだんだん育っていっていることが分かった。子どもの育ちや学びが見える化できていており、保育者が子ども達の育ちを実感し、学びをより深いものにしていくべきと考え、次の学びを考えていく必要があると思う。

５．今後に向けて

・今後に向けて、共主体的な保育を推進し、それぞれの思いや願いを出し合いながら、遊びや活動に繋がっていく話や保育者だからこそもっている良さ、子どもの良さの両方が生かされているような保育をしていきたい。
・保育の質の向上に向けて子ども理解や思いを感じること、地域資源を活かしていくことをしっかりと理解をしていきたい。これからの社会では地域社会とのつながりが重要さを増している。
・架け橋期のカリキュラムを作っていくが、幼保小プログラムというものを確認し、この時期にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を深めていく。
・子ども達にとって身近なたからものの１つは保育者ではないかと思う。子ども達が豊かな人生を送るために保育者として幼児期からの豊かな体験、学びの充実に取り組んでいくことは当たり前のことである。子どもの姿を可視化、見える化し、共有してほしい。
・鳥取第三幼稚園の研究を通して私自身（指導助言者）も、つながりの輪の中で、共に楽しみ、共に創り出す保育者の姿が子どもに安心感を生み、心の安定をもたらし、生きる上での基盤が作られているように思う。そして０歳からのつながりということを意識しながら保育者自身が保育を楽しみたいと思う。楽しい保育であることがとても大切であると今回の研修で学んだ。みなさんも保育を楽しんでください。